

市政報告 議会報告

春夏秋冬

春夏秋冬 第27号

発行/高橋たくみ事務所
仙台市青葉区通町2-9-15
TEL.022-725-3019
FAX.022-725-3029
E-mail:sendai@takumi-takahashi.net

令和4年6月20日(月)

令和4年第二回定例会 一般質問

音楽ホール整備

～国内無二のトップを目指して～

音楽ホール整備について、私は以下の理由で反対の立場であった。①宮城県が進めている新県民会館の移転計画が先行し、なおかつ、本市が計画する音楽ホールと同規模である2000席を整備する予定であること②本市音楽ホール計画の骨子である多様な演出を可能とする劇場形式に転換できるホールとする点などが宮城県の新県民会館と重複していることから、二重行政への懸念や音楽ホールそのものの必要性に疑問。

「なぜ、市民は、居客の立ち、としてトップクラスという、並に、がわ、がなを多くされ、新県民会館との差別化を強調し、トップクラスの音楽ホールとはどのようなものなのか、そして、どのようなホールであれば市民に理解していただけるのか、私自身、改めて関係資料や他都市の実地調査を始め、地域の方々はもとより、音楽ホール構想から関わる有識者や、私がバイオリンを習っていた元仙台フィルのコンサートマスターの方や関係者の方にも御意見を頂戴してきた。その結果、本質的な日本トップクラスの音楽ホールが整備されるのであれば、必ず市民が国内外に誇れる施設となり、数十年先も本市民にとっての財産として人々から愛される施設になり得る可能性があるかもしれない。当局には、私はじめ市民の皆様への抱く疑念を確信へと導いていただきたいと願う。」

なぜ国内トップクラスで、国内トップを目指せないのか。音響にこだわるのであれば、音響日本一でもいいと思うが。

A 市長

本市の音楽ホールは、品格ある雰囲気の中で素晴らしい音響に直接触れられるハード面はもとより、市民の皆様とともに多様な文化芸術活動を展開するソフト面を兼ね備えた文化芸術の総合拠点を目指す。立地を決定した青葉山エリアは、かつての仙台のまちが南から北に始まりの地という歴史的な重みをも有し、都心部に近接しながら、緑深い森や広瀬川の清流など、豊かな自然にも囲まれた、杜の都にとって特別な場所。近隣には多様な文化や歴史、また学術の資源が重層的に集積している。こうした青葉山エリアの魅力を最大限に生かしながら、訪れる人々の感性を最大限に研ぎ澄まし、文化芸術をさらなる高みへ押し上げる我が国トップクラスの音楽ホールをつくり上げたい。

市長の目指す「兵庫県立芸術文化センター*1」について、音楽ホールとしての良い評価を得ることができなかったため、私は大反対。

音楽ホールのメインはコンサート、オペラはオペラハウス、ミュージカルや歌舞伎などは劇場と、海外ではそれぞれ完全独立しているものを本市では複合化させようとしているから、それぞれの良いところを合体させるだけでは、複合化させても決して本物と評価されることはない。世界のみならず、国内でもトップと評価されるホールには程遠い。加えて、シューボックス型多機能劇場を整備する予定の宮城県の新県民会館と、そこまで大差がなくなることを懸念する。多機能化を目指し、何かに特化した形をメインにして、サブ機能を小ホールに整備するなど、トップを目指すならば、それぞれの専門性を分けた形で総合的に多機能性を図る必要があるのではないかと。

*1 兵庫県立芸術文化センター

稼働率の高さ	★★★★	音響(大ホール)	★★
多機能性	★★★★★	音響(小ホール)	★★★★★

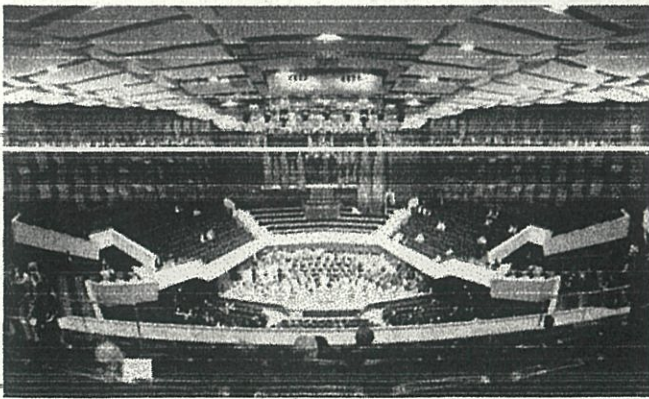
長方形の箱型型=シューボックス型※
本市も宮城県の新県民会館もこの予定

アリーナ形式=ヴァンヤード型

*一般的に、シューボックス型の演劇は小ホール中規模、ヴァンヤード型は大規模なオーケストラなどの演劇に特長と評価されている。

「私は音響設計家 豊田泰久氏を推薦します!!」

サントリーホールをはじめ、アメリカのウォルト・ディズニー・コンサートホール、ハンブルクのエルブフィルハーモニー、上海シンフォニーホールなど、世界で評価の高いヴァンヤード型のコンサートホールの設計に携わり、音響設計業界では世界トップクラスの人物。世界中から豊田氏が設計したホールで演奏したいという声が続絶えることなく、ある意味、世界の豊田ブランドが確立。本市の音楽ホール整備に携わっていただくことが出来たら、名だたるオーケストラが集まる可成り喜ぶ。豊田氏が日本で初めて日本に携わっているこのタイミングを逃すことがないよう、豊田氏とコンタクトを取り、意見交換して欲しい。



ドイツライプツィヒのゲヴァントハウス(ヴァンヤード型) ©ごーふぁーの旅ブログ



音響拡散モジュールと白いバルコニー席前面壁 ©Gewandhaus zu Leipzig



ハンブルク、エルフィ内部(ヴァンヤード型) ©Elphi, Hamburg

(裏面につづく)

音楽ホールに付随する音響研究機能についても提案したい。音響表現と科学研究の双方のために創設された世界最大の公的研究所であるフランス国立音響音楽研究所^{※2}があるが、日本には同類の研究施設はない。市音楽ホールをヴィンヤード型にし、音響の日本一を目指すことを前提にして、日本で唯一の音響研究所を設置するのはいかがか。

幸い、本市には世界水準の音響と学術会議機能を

***2 フランス国立音響音楽研究所**

最先端のテクノロジーを駆使した研究をフランス国内外の大学や企業と共同で実施され、その内容は音響学、信号処理、情報処理、音楽学、音楽認知研究などに及び、また国際的作曲家の創作活動の場として、これまで世界で著名なパフォーマー、技師、研究者も多く輩出してきた国立機関。

備えた川内森ホールを所持する東北大学があり、同大学は電気情報物理学や音響工学など、音響研究が盛んであることから、官民学連携で新たにより高度な文化芸術振興の拠点として音楽ホールの価値をさらに高められるのではないかと。

A 文化観光局長

本格的な音響研究のための機関を設ける場合には、必要な設備や費用対効果など、外部と協議

する前にまず本市として検証すべき課題が多くある。本市の音楽ホールでは、他施設のモデルとなり得るような優れた音響性能を追求するとともに、大学など関係機関の協力もいただきながら、音楽に関する人材を育て、様々な知見を積み重ねていくことも大切だ。楽都仙台を象徴する拠点として、音楽文化の向上に貢献し、市民が誇り得る施設を目指したい。

1955年から1972年の日本の高度経済成長期に全国各地で盛んに建設が始まった公共の会館やホールは、その大半が多目的ホールであった。多目的ホールは多彩な用途に使えるという一方で、設備や演出効果が不十分であること、また、個別の目的に対応する専門性は欠けてしまい、現在は芸術愛好家や演劇・音楽などの専門家がよりよい環境を求めざるを得なくなった。現代社会が求めているのは、使用目的を限定した専門性の高い会館である。当局には、時代をしっかりと見極め、市民が心から求める音楽ホールの整備を行っていただきたいと願う。

伊達政宗公と騎馬像

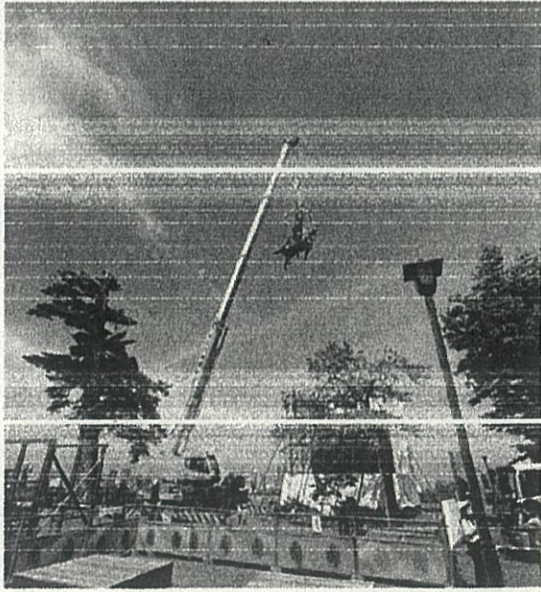
— 仙台のシンボルとして —

本年3月に発生した福島県沖地震によって、仙台市民のシンボルの一つである伊達政宗騎馬像が残念ながら被害を受けた。直接被害に遭ったのが政宗公自身でなかったことが不幸中の幸いだが、このたびは政宗公の愛馬、五つの島と書く五島が足に傷を負いながらも必死に政宗公をお守りし、倒れないように耐えてくれた。何とあっぱれなことでしょう。現在は、五島は政宗公とともに養生中ということで、江戸へ参勤交代の準備を進めている最中であり、お戻りは来年4月を目指しているとのことだ。

昭和39年に設置された騎馬像は、二代目の騎馬像であり、初代騎馬像は、伊達政宗公300年祭協賛会が企画して、宮城県柴田郡出身の小室達氏が制作したもので、昭和10年に設置された。昭和19年の金属類回収令にて、戦争中、御出陣にもなされた。戦後見つかった初代像の一部は、博物館の庭に飾られている。

二代目騎馬像は、戦後に市民から再建の声が上がったこと、また、柴田町で初代像の石台の痕跡が保存されていたことで、二代目像が仙台城址に戻ることに叶い、現在に至る。

しかし、宮城県沖地震や東日本大震災も耐え抜いた二代目像も御年58歳、お年を心配するところではあるが、ブロンズの耐久性は非常に高く、過去の歴史を見ても、戦争などで故意に破壊された例はほとんどなく、今は木が朽ちてしまっているという。今回そのブロンズ像に亀裂が入ってしまったのは、よほどこれまでダメージを蓄積してきたのか、これまで仙台の平和を見守っていただいていたことに感謝の念に堪えない。



江戸へ向かう伊達政宗公

騎馬像がお戻りになった以降は、健康状態のチェックを定期的に行っていただきたいかがか。

先日、柴田町のしばたの郷土館へ行ってきた。学芸員の岡山氏の先導の下、今回被害に遭った足の石膏の型を見せていただきながら、被害状況などについて意見を交換させていただいた。騎馬像は4.5トンの重さがあり、その総重量を五島の左前脚と右後ろ脚で支えている。台座についている左前脚は爪先が触れているだけで台座に固定されていないそうだが、全重量を支える一本脚が、石膏のほうを踏まないと芯棒が入っていない。脚の固定方法は膝ぐらまでの長さの芯棒が中にならずに完全に固定されず、たとえ来年お戻りになられても、大きな地震等があれば、またケガをしてしまう可能性があることを岡山氏は指摘していた。

ケガをした二本の脚の中の隅々までチェックし、芯棒など、必要な処置は今回の養生に含まれている

のか、そして、完全回復されたお姿になった上で、来年開催されるグリーンフェスタに間に合うようにお戻りになれる工程となっているのか。

A 青葉区長

右後ろ脚と左前脚、銅像を支えているその両端の足首部分に亀裂が生じ、正面から見て左側に傾いたほか、くらの裏側などに亀裂が生じた。修復に当たっては、騎馬像並びに地山と呼ばれる金属製の台座を7月上旬に、東京の修復業者の工場に搬入し、脚部を切り開き、内部の詳細な調査点検を行った上で、大きな地震にも耐えられるように、右後ろ脚、左前脚、それぞれに入っている金属製の芯棒、またその取付け部分に十分な補強を行った上で交換作業を行っていく。あわせて、その他の被災の箇所についても補修を行い、来年の3月末をめどに再設置する予定。

今回、足首以外にも数か所の傷みが確認されているおり、定期的な点検の必要性を改めて私どもも認

識させていただいた。この修復が終了した後については、その手法や頻度を改めて検討し、定期的な点検を実施、適切に管理をしまっている。

Q

仙台城大手門の復元は、10年後の令和10年度に完成を目指している。その頃になると、数え年を加えて、二代目像も後期高齢者の仲間入り。政宗公御本人よりも長く働いたことになる。大手門のお披露目に合わせて、二代目像には御隠居いただき、三代目政宗公の騎馬像に代替わりすることも提案したい。

それに加え、騎馬像は日中見上げてもどこにあるか分からない、見えにくいというお声をいただくことがある。山城で、やぐらもないので致し方ないところではあるが、昼間でも一目瞭然と仙台城の騎馬像を見ることができるよう、岐阜駅前にある織田信長像のように黄金の像にするのはいかがか。なぜ黄金なのかと言われれば、豊臣政権下で一揆を扇動した疑いで秀吉に謁見した際、死に装束に黄金の十字架を担いで参上し、その派手なパフォーマンスで命を取り留めたという政宗公であればこそ、黄金がふさわしいと考えるところである。

A 青葉区長

現在の騎馬像は、大正から昭和の時代に活躍し、著名な彫刻家でもある小室達氏の手による芸術作品である。ブロンズ像特有の風合いも含め、この都仙を象徴するものとして、市民の皆様はもろろん、日本中の方々に広く知られ、親しまれている。まずは、この人々に愛されている騎馬像を未来へ継承し、末永くこのまちで暮らす人々を見守っていただけるよう、しっかりと修復を進めていきたい。その上で、史跡や青葉山の自然環境との調和も踏まふながら、この騎馬像が本中のシンボルとして存在感がより高まるよう、関係部局とも連携し、検討してまいります。

Q

コロナ明けの今、本市は再び観光を頑張る行かなければならない。仙台といえば青葉城という、その観光地に大きなシンボルは今後必要だと思う。

A 市長

実は今、仙台国際音楽コンクールが開催されており、世界各地の著名な音楽家の皆様方、演奏家の方々に審査員にお招きをされている。そして、その審査員の皆様方を、御苦労をねぎらう意味で、先日、仙台市内のホテルで夕食会を開催させていただいたが、その折に、あちらに仙台城、仙台のまちを切り開いたお城の跡がございまして御紹介をさせていただいた。そのときには、ちょうどあの石垣の修景、政宗ビューのところが木が少しきれいになっていて、見ることも可能であった。そして、そこに黄金の騎馬像があれば、それは金色にきと光り輝いているだろうと思う。まずは、二代目の騎馬像について修復をさせていただき、そしてしっかりと安定した形でまた仙台にお戻りいただき、その騎馬像が遠くからもはっきり分かるように様々な形で対応をすることは可能であると思っている。